

第26回日本放射光学会年会・放射光科学合同シンポジウム報告

実行委員長 竹田美和 (名古屋大学・科学技術交流財団)

第26回日本放射光学会年会・放射光科学合同シンポジウムが2013年1月12日(土)から14日(月:祝日)にかけて名古屋大学 ES 総合館および坂田・平田ホールで開催された。人気グループ「嵐」のコンサートが、11日～13日に名古屋ドームで開催されるため、名古屋市内のホテルは殆ど抑えられていることが12月初めに偶然分かった。急いで、名古屋市周辺のホテルやインターネットで予約できない旅館等を調べて、会員にお知らせしたが、学会参加者は事前登録者+ α 程度になってしまうのでは、と覚悟した。しかし、蓋を開けてみると、シンポジウム参加者601名、懇親会参加者333名となり、例年と変わらず盛況であった。宿泊施設の確保が困難な中、参加頂いた皆様に感謝申し上げます。口頭発表106件、ポスター発表274件、企業展示49件でこれらも例年通りであった。

特別講演では、上野信雄教授(千葉大学)と Antonio Cervellino 博士(SLS: Swiss Light Source, スイス)にそれぞれ「有機半導体の本性と電子状態」と“Detectors for Science and Industry at the MS-beamlines of SLS”というテーマで講演頂いた(写真1, 2, 3)。上野先生には、分子研 UVSOR の BL8B2 の建設から始まり、角度分解光電子分光法、有機薄膜の光電子スペクトルの精密解析、有機エレクトロニクスのご研究とその到達点をご講演いただいた。Cervellino 博士は、世界的に高い評価を得ている SLS の材料科学ビームラインの責任者である。企業との連携には、SLS の元研究者が設立したベンチャー企業が測定の事前打ち合わせから解析サービス、料金計算までを担当し、BL 研究者はそのような雑務から解放されること、また、これも世界的に知られている検出器 PILATUS が SLS で開発され、現在はベンチャー企業が製造・販売していることには、SLS の特徴を生かすしたたかな戦略があることを、淡々と報告された。

市民公開講座には、高校生から70歳代まで広く133名の聴講者があった。「人と地球を守るシンクロトロン光」と題して、まず、曾田一雄先生の「はじめに：電子は光—シンクロトロン光とは」とシンクロトロン光の発生原理と特徴について説明があった。次いで豊田中央研究所の高橋直樹氏が「シンクロトロン光を活用した自動車排ガス浄化用触媒の研究開発」と題して、車の排ガス浄化について、また「土壌・水と生物圏の汚染とシンクロトロン光」と題して、環境問題についてもシンクロトロン光が広く使われていることを千葉大学の沼子千弥先生が分かりやすく報告された。聴講者の評価は「とっても楽しい」「楽しい」が圧倒的であった。一方、かなり専門性のある鋭い質問もあ



写真1 上野先生(千葉大学)特別講演



写真2 Cervellino氏(SLS, スイス)特別講演



写真3 S会場(坂田・平田ホール)

り、講師から「よく勉強しておられるのですね」とのコメントがあった。参加者の一部は「知の拠点」(あいちシンクロトロン光センターと高度計測分析センター(18種のトップレベルの計測分析機器が専門家のオペレータと共に配置されている)が併設されている)の施設見学に参加した。アンケートによると、参加の理由は「知識の習得、放射光に興味あり」が圧倒的に多く、身近な話題で分かりや

すかったとの評価であった。市民公開講座は、公益財団法人科学技術交流財団の支援、名古屋大学、愛知県教育委員会、名古屋市教育委員会の後援を頂きました。

市民公開講座の後、同じ会場で企画講演「シンクロトロン光が走らせるグリーンビークル」という開催地にふさわしい内容で構成された3時間の講演があった。この企画講演は公益財団法人日比科学技術振興財団の共催を頂きました。企画講演については別途報告がある。

13日午前には、「知の拠点」の見学会が行われ、142名の参加者があった。ここでも、シンクロトロン光センターと高度計測分析センターの両者を見てもらい、知の拠点がシンクロトロン光施設を頂点とする one-stop サービスの計測分析センターであることを知って頂く企画であった。参加者の内50名は、地下鉄とリニモ（東部丘陵線・リニアモーターカー）で来られ、名古屋市内から近いことを実感されたようである。シンクロトロン光施設の実験ホールは自由見学とし、各ビームラインと光源（搬入口のブロックを開放）に説明要員をおいた（写真4）。

ここ最近では4日間の会期であったが、やや間延び感もあり、今回は、会期を3日間に抑えることとした。また、一般講演は3パラレルとし、近い分野が重ならないよう工夫したつもりである。セッションの構成は可能であったが、施設の懇談会や各種委員会がセッション間や昼休み、場合によってはセッション終了後に埋め込まれ、運営側としてはかなり細かい気配りが必要であった。

会場の構成上、ES総合館の1階に受付と企業展示およびポスター（写真5、6）の多くを配置し、A～C講演会場がある2階に施設報告と加速器（光源）、ビームライン・計測器、ポスト・デッドラインのポスターをまとめた。S会場は前記のように坂田・平田ホールとし、ここに市民公開講座、企画講演、特別講演、総会、奨励賞受賞講演をすべてまとめた。

今回の年会からの新しい試みとして、オーラルセッションに招待講演枠を設けることがプログラム委員会にて提案され、組織委員会・評議員会において議論した結果、認められた。招待講演者は、それぞれの研究領域で、最近、興味深い研究成果を挙げていて、是非講演を聞いてみたい、他の会員の皆様に聞いてもらいたい、という研究者をそれぞれの分野を担当するプログラム委員に推薦して頂いた。通常講演の2倍の30分を割り当てた。プログラム委員会の議を経て今回は、高嶋圭史氏（名大）、竹中久貴氏（㈱トヤマ）、辛 埴氏（東大）、近藤寛氏（慶応大）、松永利之氏（パナソニック㈱）、土山 明氏（京大）、寺崎一郎氏（名大）、沈建仁氏（岡山大）、の各氏が招待講演者として選ばれた。初回ということもあってか、そうそうたる顔ぶれで、各講演会場とも多くの聴衆を集めていた（写真7）。

余録であるが、ES総合館の2階に、2008年ノーベル賞受賞者（益川先生、小林先生、下村先生）の展示コーナーがあり、12日と13日、休日にもかかわらず特別開館をお



写真4 施設見学（すべて開放）

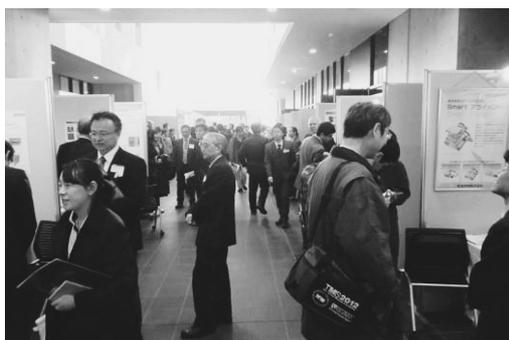


写真5 賑わう企業展示（エントランスホール）

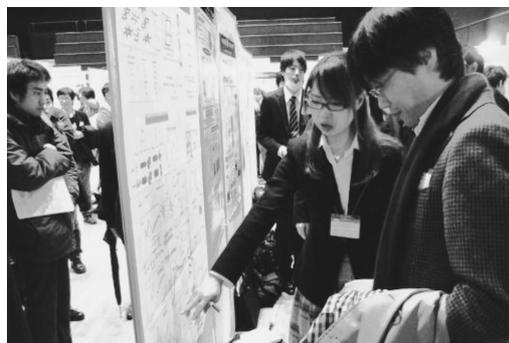


写真6 ポスター会場



写真7 B会場（招待講演）

願いし、40名と75名の来館者があり、通常の4~7倍だそうである。

名古屋地区での開催にあたって、前回の第19回と同様、名古屋大学側が実行委員長、分子科学研究所極端紫外光研究施設側がプログラム委員長として共同で関わることにした。

現地実行委員には、名古屋大学だけでなく、科学技術交流財団、豊田中央研究所、名古屋工業大学からも加わって頂いた。会場は前回のIB電子情報館では狭く、建設前のES総合館を早くより予約し、600名の参加者を収容できた。懇親会も学内でを行い、出費を抑える努力をしたが、大学生協もモダンな建物になっており、会場として十分であったと思う。

懇親会には参加者の過半数がご参加いただいた（写真8）。主催学会側から、実行委員長、会長の挨拶の後、開催校を代表して國枝名大副総長の歓迎の言葉を頂いた。いつも来られる文部科学省量子放射線研究推進室原室長は、残念ながら急務予算折衝のため直前のキャンセルとなった。佐々木泰三先生ならではの言葉も交えた乾杯の発声で宴が始まった。恒例の鏡割りでは勢い余って樽酒の酒が飛び散る、というハプニングもあったが（写真9、10）、概ねご満足頂いたのではないと思う。

広島大学放射光科学研究センター谷口雅樹センター長から次回開催のアナウンスで懇親会は中締めとなった。

14日午後のポスターセッションと企業展示を以ってシンポジウムは無事終了した。例年この時期は寒さ厳しい折であり、14日は東京都内でも積雪が見られたほどであった。朝一番の会場は暖房が効かず、早めの対応が必要であった。また、エントランス・ホールは玄関の通気とガラス壁からの脱熱が厳しく、受付のワーズの皆様および展示企業様にはご迷惑をおかけしました。

7年前の第19回合同シンポジウムに比べ、会期中のイベントが増えたためか、実行委員会を多数回開かざるを得なかった。2012年4月26日のPre実行委員会（第1回組織委員会の前）を初め、会期前日の実行委員会を含め全6回を開催した。それでも詰め切れず、当日修正した点多々あり、参加者の皆さんにご迷惑をお掛けしたかも知れません。

無事に終了したことをご報告すると共に、ご参加頂いた皆様と運営に携わって頂いた学生・職員・事務局・実行委員の皆様へ感謝申し上げます。



写真8 懇親会



写真9 鏡開き（ここまでは順当）



写真10 鏡開き（勢い余って…）

第26回合同シンポジウムの開催に当たり、名古屋大学の後援、公益財団法人科学技術交流財団の支援および公益財団法人大幸財団の助成を賜りました。ここに記して謝意を表します。